

ベルト・コッホ (Robert Koch) に従ひて細有機物学を修めんと欲するなり。』

万事が控え目な日記にあって、はっきりと自分自身の希望を表現しているのは稀である。しかし、首都ベルリンでの生活は必ずしも研究だけに専念できる立場ではなくなっていたことは不本意であったであろうことなど、ベアーテ女史と話が一致した。

何か研究のお役に立てればと何うと、コッホの日本訪問 (明治41年) 当時の資料がドイツでは入手し難く、特に当時の日本の結核の状態を知りたいとのことであった。私の属する日本結核予防会 (JATA) の師であり先輩である2人の著作 (青木正和, 「結核の歴史—日本社会との関わりその過去, 現在, 未来」, 島尾忠男, 「Living with TB for fifty years 結核と歩んで

五十年」) がありますからお役に立つでしょう。帰国後に送りますと約した。

一通り話が終わるころ、これからコッホ記念館館長に電話してあげるから寄っていきなさいと強く勧めてくれたが、時間の関係でせつかくの親切を無にせざるを得なかった。

私にとって鷗外は史伝を中心として、学生時代から細々としたものではあるが、終生の読書となっているものであり、鷗外ゆかりのベルリンで鷗外について語り合える人が存在することは至福の体験である。再びフリードリッヒ・シュトラッセ駅で乗車して、新築なったベルリン中央駅方面に向かって発車して直ぐ車窓の右手 (北側) に、以前よりもっと大きく美しく森鷗外記念館の標示がある石造アパートが見えた。

〈TBアーカイヴだより〉

第5回TBアーカイヴ事業推進・ 運営委員会の報告

公益財団法人結核予防会

総務部長 竹下 隆夫

平成22年12月22日 (水) に第5回TBアーカイヴ事業推進・運営委員会が開催され、最初に岩井和郎結核研究所顧問ほか3名の臓器ワーキングチームによって進められている、結核剖検例 (病理標本) 保存整備に関する報告があった。

結核研究所には、戦前に中野診療所から寄贈された結核解剖ホルマリン固定保存例164をはじめとする剖検資料がプレハブ2棟分あり、その病理解析とデータ化 (教材化) や永久的保管方法が課題であった。

一昨年、これらのうち今後の研究にも役立つ重要な剖検・手術臓器、病理標本を選別し、ポリバケツにして200余りを残すこととし、その他は僧侶に来ていただき懇ろに供養をしたうえで廃棄した。そして、これを研究に供するため、昨年から今年にかけて、その病理所見を記載し、肉眼所見の写真撮影を行い、ホルマリンを新しい10%ホルマリン液に入れ替え、劣化したポリ容器を新しい容器に交換する作業を行っている。

また、並行して病巣からの結核菌DNA抽出のための資料採取を実施し、抗結核薬導入前と導入後での病理診断比較に供することとしている。

作業は、TBアーカイヴ事業推進・運営委員会の病理標本整理部会 (臓器ワーキングチーム) として岩井

和郎結核研究所顧問ほか3名が進められているが、ホルマリン (フォルムアルデヒド) は特定化学物質で、この作業には作業員へのホルマリン蒸気暴露による健康障害を防ぐ装置の設置を必須としている。このため、労働基準監督署への届出が必要であり、作業の場所として選定した結核研究所の裏手に6畳のプレハブ小屋を建て、その内部に「プッシュプル型換気扇装置」を設置し、三鷹労働基準監督署に届け出てから作業を開始している。

次に前回委員会以降、新たにご寄贈いただいた「南湖院絵はがき」や著書『南湖院と高田畊安』などの報告と、大阪の小松病院から「杏医療資料館」の全資料を保管・管理してほしい旨の申し出についての協議が行われた。

また、現在、断続的に本誌に掲載している「結核に関するゆかりの地」訪問取材の報告と今後の予定として、刀根山・須磨の浦及び富士見高原の療養所跡地や野麦峠の取材について話し合われた。

そして、資料の保管場所としては、検体・機械類・一部の書籍等は結核研究所エネルギー棟倉庫に、ポスター・書籍・切手類は結核研究所図書室視聴覚室にすることが決められた。